

Title	<書評と紹介> 長谷川成一著 『北の世界遺産白神山地の歴史学的研究 森林・鉱山・人間』
Author(s)	脇野, 博
Citation	弘前大学國史研究. 137, p.76-78, 2014
Issue Date	2014-10-30
URL	http://hdl.handle.net/10129/6315
Rights	
Text version	publ isher



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

長谷川成一著

『北の世界遺産 白神山地の歴史学的研究』

森林・鉱山・人間』

脇野 博

1

白神山地は、青森県西部と秋田県北西部の県境にまたがる、すなわち近世においては弘前藩領と秋田藩領にまたがる、標高約一〇〇メートルから一二〇〇メートル余りに及ぶ山岳地帯の総称である。東から冷水岳、小岳、雁森岳、二ツ森、真瀬岳など一〇〇メートル内外の山岳が林立し、最高峰、向白神岳（一二四三メートル）は、白神岳（一二三三メートル）とともにこの山地の西端に位置している。現在、人里に近い場所や林道沿いにはスギを主とした造林地やミズナラなどの落葉広葉樹二次林も見られるが、ブナ林が広大な地域を占めているのが白神山地の植生の最大の特徴である。特に、青森県の向白神岳―白神岳から、県境を経て秋田県の大臼岳―次郎左衛門岳に至る山地は、地元住民による山菜取りやまたぎによる狩猟などごく限られた利用しかされてこなかったため、原始的な状態を維持した良好なブナの天然林が広がっている。また、豊富な自然植生のもと、多様な動物も生息しており、かつては広く東北地方を被っていたであろう冷温帯域の極相状態の生態系の姿を残した山地としてたいへん貴重な地域である。

このような自然豊かな白神山地は国定公園地域等として保護されてきたが、一九九三年には、多様な生物相を含んだ白神山地のブナ林は、「純度の高さやすぐれた原生状態の保存、動植物相の多様性で世界的に特異な森林であり、氷河期以降の新しいブナ林の東アジアにおける代表的なもの」であり、「様々な群落型、更新のステージを示しつつ存在している生態学的に進行中のプロセスの顕著な見本」として、世界自然遺産として登録された。

世界遺産登録後の白神山地は、一躍世間の注目を浴び、今や青森県と秋田県を代表する観光資源として両県経済に大きな貢献をするとともに、世間の多くの人々の自然環境保護に対する意識を高める役割も果たしている。

こうして、世界遺産白神山地のブナ林が有名になり、白神山地登山がいささか過熱化している白神山地ブームとも言えるべき世情のもとで、長谷川成一氏の本書が上梓された。白神山地と言えば、多くの人々が鬱蒼としたブナの原生林で被われた山地というイメージを抱き、極端な場合は、白神山地は人の手つかずの太古からのブナ原生林が残された、まさに生態系本来の姿が残された聖地というイメージを抱く人もいるであろう。しかし、本書はこうしたいわば伝説化した白神山地のイメージに、大きな一石を投じることになるのである。

2

本書の構成は次のようである。

まえがき―問題の所在―

I部 森林

第一章 国絵図等の資料に見る江戸時代の白神山地

第二章 弘前藩の史資料に見える白神山地

第三章 近世後期の白神山地

第四章 白神山地における森林資源の歴史的活用

―流木山を中心に―

II部 鉱山

第一章 近世前期津軽領鉱山の開発と白神山地

第二章 延宝・天和期の尾太（おっぷ）銀銅山

―御手山の繁栄と衰退―

第三章 天和と正徳期（一六八一―一七一五）における尾太銅鉛山の

経営動向

第四章 一八世紀と二〇世紀の尾太鉱山史

―付・特論 尾太鉱山の囚人労働について―

III部 人間

第一章 一八世紀前半の白神山地で働いた人々

―最盛期尾太鉱山を事例として―

第二章 「天気不正」風説と白神山地

第三章 足羽次郎三郎考 ―その虚像と実像―

第四章 足羽次郎三郎と大坂の住友泉屋

あとがき

I部では白神山地が絵図や文献にどのように描かれてきたかを緻密に分析し、森林の植生や利用の実態が解明された。II部では白神山地における鉱山開発を取り上げ、白神山地の尾太（おっぷ）鉱山が銀山から鉛銅山へと展開していく様相が明らかにされ、これまで未解明であった弘前藩領における鉱山開発の歴史が跡づけられた。III部では、鉱山経営者であった津軽の商人足羽次郎三郎の活動や気象問題を中心に分析し、白神山地の資源開発を通じた人間と白神山地との関わりを明らかにした。

さて、これまで白神山地の歴史、特に前近代については、自然科学の諸分野では研究が行われてきたものの、人文・社会科学分野においては、木地師やまたぎ、あるいは菅江真澄についての若干の民俗学的な研究を除けば、歴史解明の研究は皆無であったと言ってよいであろう。したがって、近世以前の白神山地がどのような森林であり、森林と人々がどのように関わってきたのかなどいうことは、ほとんど不明であり、それゆえ白神山地は手つかずの太古からのブナ原生林などというイメージが醸成されることになったのである。こうしたなかで、近世の白神山地の歴史解明に取り組みされたのが本著者の長谷川成一氏であり、長谷川氏は実証的な研究により、これまでの白神山地に関する誤った歴史を正し、新たな事実を発掘されたのである。

例えば、歴史上、白神山地が初めて記述に現れるのは天明三年（一七八三）から文政十二年（一八二九）にかけて書かれた菅江真澄の日記『菅江真澄遊覧記』であるというようなことが言われてきた。しかし、本書において長谷川氏は弘前藩の国絵図や山絵図に着目し、それらを読み解くことで、一七世紀半ばに弘前藩が作成し幕府に提出した国絵図に

は、白神山地が描かれ「しらかみの嶽」と呼ばれていたことを明らかにした。そして、本書の最大の功績である次の指摘、すなわち近世期の青森県側白神山地にはもともと豊かなヒバ林やスギ林があったが、近世後期に至るまでに乱伐された結果、ブナなどの広葉樹を主にする森林に変わったと推測できるという指摘は、世間の多くの人々が抱いている白神山地のイメージを大きく変えることになる。また、白神山地に位置する尾太鉾山などが弘前藩によって盛んに開発されてきたということも、白神山地の森林開発と並んで、手つかずであったという白神山地の自然に対する認識を正すことになろう。

つまり、本書は白神山地の森林はブナ原生林ばかりではなかったこと、そしてその森林には古くから人の手が入っていたことを明らかにしたのである。

3

本書は、弘前藩鉾山史でもあるので、本来ならばその鉾山史としての研究成果についても言及すべきであるが、評者の能力の限界からそれはご寛恕いただきたい。そこで、本書が上梓されたことが持つ意義の大きさについて、最後に述べておきたい。

本書は国絵図や山絵図などを読み解くことを通じて、文献からではなかなかわからない当時の植生や森林利用などを解明し、山や森林の歴史を分析する方法としての有効性を示した。これまで、林政・林業史研究においては、こうした絵図を解読して研究するということはほとんど行

われてこなかったが、絵図情報の利用は今後、有力な研究方法として扱われるべきであろう。特に、山絵図や沢絵図など、山地や森林に関わる画像情報はかなり残されているが、研究が文献中心という慣例に加え、絵図自体が断片的であったり、年代不詳というものも多いことから、利用されずお蔵入りになっているものが多い。しかし、これからはこれらの絵図を貴重な情報源として利用し、その分析方法を鍛え上げる努力をすべきであろう。

そして、もう一つの意義は、本書が私たちが自然だと思っているものの多くには、すでに人間の手が入っているということ、あらためて証明したことである。今日私たちが見ている日本国土の景観は、自然自体の変化のほかに、先祖が何千年の昔から意識的・無意識的に自然に働きかけてきた結果でもあるという古島敏雄氏の訴え（『土地に刻まれた歴史』岩波新書、一九六七年）から半世紀近くたつが、今の私たちは手つかずの自然にあこがれるがゆえに、それを現実に投影しがちである。しかし、人間は自然に手を入れる、つまり加工（破壊）せずには生きていけないのであり、そのことをもつと客観的に認識すべきであろう。環境破壊に心を痛め、自然を愛する多くの方々には是非本書を読んで欲しい。

（清文堂出版、二〇一四年一月、A5判、本文三七六頁、

本体価格六五〇〇円＋税）

（わきの・ひろし 岩手大学教育推進機構教授）